

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



川村清雄（一八五二—一九三四／嘉永五—昭和九）  
波

一九三頃—一九二七

キャンヴァス、油彩

六〇・六×一五二・〇cm

一八七一年（明治四）、静岡徳川宗家の五人の留学生の一人として渡米した川村清雄は、その後、フランス、イタリアにも滞在し、海外で本格的に洋画を修行した初期の日本人となった。幕臣であった川村は士人のたしなみとして日本の伝統的絵画にも親しんでおり、一八八一年に帰国後は、油絵による日本画ともいうべき独自の境地の作品を制作した。本作は、扁額を思わせる横長の巨大な画面に、岩に砕ける波濤を描いた作品。砂浜だろうか。左下に広がる余白の静けさが、波のダイナミックスな筆勢を一層強調するようだ。

一九二七年（昭和二）、本作は旧蔵者より県立葵文庫に譲渡され、二階にあった閲覧室に掲げられることになった。当館への所蔵は、開館の一九八六年に葵文庫の後身である県立中央図書館より管理換されたことによる。

（上席学芸員 喜多孝臣）

No.  
160  
2025年度 | 冬 |

## 静岡県立美術館の40年を振り返る 4

# 足を運ぶ人—美術館に不可欠なもの

館長 木下直之

四月から始まる展覧会「静岡県立美術館をひらく」のタイトルを目にして、皆さんはどんなことを思い浮かべるだろうか。まさか午前一〇時の開館時間を、ということはないだろうが、「ひらく」ばかりでなく、ひらくべき「美術館」についても考えてみたい。

多くの人にとって美術館とは展覧会を見に行く場所であり、そのために足を運ぶ建物が真っ先に思い浮かぶに違いない。駅からの坂道を上ると見えてくるあの低い屋根の建物である。

美術館とは「二重の壁」が私の持論であり、まず迎えてくれるのは最初の壁Ⅱ外壁、すなわち外観であり、それはしばしば設計者の名前とともに語られる。坂倉準三の神奈川県立近代美術館（現在の鎌倉文華館鶴岡ミュージアム）、前川國男の東京都美術館、ル・コルビュジエの国立西洋美術館という具合に。ちなみに、当館は設計共同企業体静岡設計連合によるもので、その

代表を高木滋生が務めた。

しかし、外気や風雨や虫や泥棒から美術品を守るための外壁を、そう簡単に「ひらく」わけにはいかない。そこで展覧会会期中にバックヤードツアーを行ない、ふだんは閉ざしているいくつかの扉をひらくつもりだ。

ところで、私のような内部の人間にすれば、建物は容器に過ぎず、いずれは老朽化する建物がまぼろしのように見えることがある。美術館には、ほかにいくつもの構成要素がある。展示物（そのために人は足を運ぶ）、コレクション（これこそ美術館の実体という考え方が根強い）、働く人（常勤から非常勤まで、ただし世の中と同じでどんどん入れ替わる）、投じられる資金（税金から寄付金まで）、役割（理念から個々の企画の趣旨や効果まで）という具合に、それらはだんだんと見えにくくなる。このいずれを欠いても、美術館は社会的な存在ではなくなる。とはいえ、コレク

ションを持たない美術館もあるのだから、コレクションのみを指して「実体」と呼ぶことはできないかもしれない。

実は、美術館にはもうひとつ重要な構成員、ステークホルダーがいる。それが訪問者、鑑賞者、観客、利用者、要するに美術館が提供する展覧会や展示物を見る人であり、オンラインでのアクセスが可能になった今、それは実際に美術館までやって来てくださる人とは限らない。この人たちがいなければ、美術館は成立しない。

たとえば画家が描いた絵を誰ひとり見ることがないとしたら、それでもそれは「絵」であるといえるだろうか。受け止める人がいてはじめて成り立つ最小限の関係が美術館の原点なのである。それを具体化するために、先に挙げた建物、コレクション、人、資金、理念が総動員され、現在の姿になった。「見る人」ではなく「受け止める人」という言い方に変えてみた。長く美術

館は「見る場所」であることを自明とし、それを疑って来なかった。私の持論のふたつ目の「壁」とは、端的に言えば絵を掛けた壁で、その前に立った鑑賞者が絵と向き合う。その行為を「見る」とみなせば、その瞬間に「見えない人」が排除されてしまう。

みなさんも、それぞれに絵を眺める体験を振り返っていただきたい。必ずしも「見る」ことに没頭していなかったはずだ。いや、「没頭」という表現がすでに「見る」ことを離れている。いろいろなことを考えるだろうし（絵とは無関係なことも含めて）、逆に何にも考えない時間もある。それは全身による文字どおりの「体験」であって、視覚体験という言葉に限定できない。

さらにまた、美術館を生活の一部として、積極的に関与してくださる人もある。まさしくボランティアがそうであるが、その多くは個人であった。これからは団体や企業とも手を携える道をひらきたいと考え、今春、企業サポーター制度を立ち上げる。県下の六つの企業が「わたしたちは静岡県立美術館の開館四〇周年を応援しています」として、一年にわたって支援して下さることになった。それを一方的な支援ではなく、協働作業へと高めたい。



# 令和七年度のロダン館での新たな取り組みについて

企画総務課主事 柳田 篤志

上席学芸員 貴家 映子

昨年度三十周年を迎えたロダン館では、開館以来、コンサートや演劇公演、現代アートとのコラボレーション展示など、ロダンとその作品に親しんでいただくための様々な試みを実施してきました。今年度は、例年になく取り組みを二つ実施することとなりましたので、ここにレポートと予告をお届けします。

まず、昨年九月下旬(例年は十一月上旬)開催となったロダンマルシェで行われたスタチューパフォーマンスについてご報告します。スタチューパフォーマンスとは、特別な衣装やメイクをほどこして、彫像になりきるといふ演目を指します。静岡では、大道芸ワールドカップin静岡や週末の「おまち」(静岡市役所周辺)で見かけたことのある方も多いでしょう。

例年、多くの方にご来場いただいているロダンマルシェですが、館内

まで足を運ぶ方はその一部に留まっています。ということで、静岡市の「まちは劇場」にも協力いただき、スタチューパフォーマンスを館内に配置してお客様をマルシェから館内、そしてロダン館へと誘導することにしました。動かないはずの彫像が館内を徘徊しているというストーリーも用意して、マルシェの数週間前からミステリー調のテキストをSNSで配信するという手の込んだ趣向も取り入れました。

当日は、GOICHIさん、マッシュ&てぃーのさん、吉沢かおさん、レプリカさんの四組のスタチューパフォーマーが参加し、マルシェの会場や館内各所でご来場の皆様を驚かせてくれました。パフォーマンスの最後

にロダン館へと集結すると、ロダンの彫刻のポーズをまねたり、あるいは、群像のように絡んでみたり…。パフォーマーの皆さんは、さすが普段から彫像になりきっているだけあって、近代彫刻の父・ロダンへの理解も深く、右ひじを左ひじに乘せるという、実はひねりのきいた《考える人》のポーズもばっちりコピーされていました。スタチューパフォーマーと並ぶことで、ロダンの彫刻も血が通って動き出すように思え、普段とは異なる雰囲気

が館内に生まれていました。スタチューパフォーマーの作品のコラボレーションを楽しみに足を運んだ来場者の皆様には親子連れも多く、記念撮影などを楽しまれて、新たな取り組みは盛況のうちに終わりました。そして、今年の一月から三月にかけての土曜日は、ロダン館を夜間に開館し、特別な仕掛けで楽しんでいただくナイトミュージアムを実施します。照明を落とした館内で、来場者自ら懐中電灯でロダン彫刻を照らしていたことで、その魅力を再発見していただくという試みです。そして、この実施期間中(一月二十日(三月十五日))は、人気VTuberの儒烏風亭らでんさんによる音声ガイドをお楽しみいただけるという特典付きです。らでんさんの音声ガイドは、中村宏展と同時開催の収蔵品展でもご用意いたしますので、ぜひ併せてお楽しみください。※詳細を八頁に記載しています。



左から、レプリカさん、吉沢かおさん、マッシュ&てぃーのさん、GOICHIさん



儒烏風亭らでん©COVER VTuber (Virtual YouTuber) とは、デジタルアバターを自身の姿と定義して活動する動画配信者のこと。

## 企画展

中村宏展  
時代錯誤  
アナクロニズムのその先へ

2026年1月20日(火)～3月15日(日)

と出会い交歓する場をつくります。ここでは各章のエッセンスをご紹介します。

## 1. 社会へのまなざし

浜松から上京し大学に進学した一九五〇年代初頭、中村は政治情勢が揺れるなかで、学生運動の高揚に身を置きました。青年美術家連合の一員として米軍基地拡張反対運動の現場に赴き、スケッチをもとに《砂川五番》(一九五五)(図版1)を制作し、日本の現代美術史に名を刻みます。一九五〇年代後半以降は左翼芸術運動から離れ、新たなリアリズムを仲間とともに模索していきます。《階段にて》(一九五九)―(一九六〇)はエイゼンシュテインのモンタージュ理論を絵画に応用することで、社会的主題と前衛的表現を一枚の絵画の中で統合する試みが結実した作品です。

## 2. 記憶の中の風景

一九六一年に発表した《場所の兆》(図版2)は、それ以前の作品傾向からは大きく転じた、何かが起こる予兆を帯びた風景が描かれています。六〇年の安保闘争後の空虚な時期に、中村の絵画に描かれたのは記憶の中から引き出された故郷浜松の三方ヶ原台地のイメージでした。さらに八九歳を迎えてから浜松での戦争体験をあらためて掘り起こし、記憶をルポルタージュ絵画として再び提示しています。

## 3. セーラー服と蒸気機関車

一九六〇年代半ば以降、中村はセーラー服の少女、蒸気機関車、風景といったモチーフを、絵画や挿画に繰り返し用いました。記憶

から引き出された個人的イメージは、絵画上で、匿名的な「呪物」へと変わり、観賞者が自由に読み取ることができる多義的な装置として機能します。

## 4. 絵画と観賞者

中村が一九五〇年代末より、絵画と観賞者が交歓することを芸術の根拠とみなす考え方を貫いてきました。中村の七〇年にわたる制作活動は、つねに新たな観賞者と出会うための装置をつくる作業であったとも言えるでしょう。一九七〇年代に開始した「車窓篇」シリーズでは、静止した絵画内に時間と運動を導入し、また二〇〇〇年代以降はタブローを連鎖させる「絵図連鎖」シリーズを展開するなど、観賞者の能動的な視覚体験を追求する作品を発表しています。



図版1 《砂川五番》1955年 東京都現代美術館蔵



図版2 《場所の兆》1961年 浜松市美術館蔵

## 5. 同時代芸術家との交流

一九六〇年代―一九七〇年代前半にかけて、中村宏が、同時代の芸術家、文学者、編集者、舞踏家らとの交流の中で、「美術」ととどまらないオルタナティブな活動を行いました。ここではそうした活動の跡をたどります。

展覧会は以上のような構成でご覧いただきます。なお会期中には、中村が影響を受けたエイゼンシュテインの「戦艦ボチウムキン」上映会や館長講演会に加え、学芸員との作品鑑賞会なども開催いたします。観覧とともに、イベントへのご参加もお待ちしております。

(上席学芸員 川谷承子)

一九三二年静岡県浜松市に生まれた中村宏は、戦後日本の現代美術を切り開いてきた作家の一人です。中村が活動を続けてきた七〇年間に、アートの潮流は目まぐるしく変化し、多様化しました。しかし中村は、絵画という「古い」メディアにあえてこだわり続け、その姿勢を自ら「アナクロニズム(時代錯誤)」と呼びました。素材の新鮮さに価値を求めるモダニズムの風潮に対して、絵画が持つ時間性と、時代を超えて観賞者の精神に働きかけることを志向してきました。本展では、次の五つの視点から、中村の表現活動を紹介します。現代の観賞者が中村の作品



## 収蔵品展

2000年代の絵画  
～静岡ゆかりの作家による

## 会期

前期：2026年1月20日(火)～3月15日(日)  
借用作品を含む後期：2026年3月17日(火)～4月19日(日)  
当館収蔵品のみ

本展は、浜松出身の画家、中村宏の個展「中村宏展 アナクロニズム<sup>時代錯誤</sup>」の先へ」の開催にちなみ、静岡県にゆかりのある石田徹也、持塚三樹、門田光雅、大庭大介、小左誠一郎五人の作家の一九九〇年代後半以降に描いた作品をご紹介します。

彼らは中村宏の表現を借りるならば、絵画という「アナクロニズム(時代錯誤)」のメディアにあえてこだわりの、独自の表現行為を模索し積み重ねてきた作家たちです。一九九〇年代半ば以降に活動を開始し、一九九〇年代後半から二〇〇〇年代にスタイルを確立してきた世代にあた

ります。彼らが美術を志し、自らの表現を模索するようになる一九九〇年代半ば以降には、一九九九年に東京藝術大学に「先端芸術表現科」が新設されたことに象徴されるように、全国の美術大学に、従来の絵画、彫刻、デザイン、工芸科に加えて、メディアアート、情報デザイン、先端芸術、映像などの名称を冠する学科が新設されました。表現手段はいまや無数にあり、第二次世界大戦後の美術史においても「絵画の死」が繰り返し言われてきました。本展覧会では、それにも関わらず、彼らがあえて絵画を選択し制作し続けてきたことへのこだわりに触れていただければと思います。以下では、生年順に出品作家五人をご紹介します。

## 石田徹也(前・後期)

一九七三年焼津市に生まれた石田徹也は幼い頃から社会に眼差しを向け、大学在籍中からの約十年間に、現代日本に生きる人々の孤独や不安を描き二〇〇点余の作品を残しました。二〇〇五年に踏切事故により三十一歳で亡くなりますが、現在は海外でも高い評価を得ています。当館は遺族から寄贈を受けた二十一点を所蔵しており、そのうち本展では前期五点、後期十点を出品します。

## 持塚三樹(前・後期)

一九七四年、島田市(旧榛原郡金谷町)に生まれた持塚三樹は、作者自身が「記憶のコラージュ」と呼ぶ、記憶や感情、

感觸の断片を画面に配置する手法によって絵画を制作しています。「生命の樹」(ヴァンジ彫刻庭園美術館、二〇一七)などに参加したほか、藤枝市主催の美術イベント「びじゅつじよろん」「げんてんち」の企画にも携わっています。

## 門田光雅(前期のみ)

一九八〇年浜松市(旧春野町)に生まれ、磐田市・袋井市(旧浅羽町)で過ごしました。絵画の図(形やモチーフ)と地(背景や空間)に関心を持ち、絵画の伝統を継承しつつ新たな絵の具の可能性やその限界にも挑んでいます。近年は「the ENGINE」(セゾン現代美術館、二〇一九)、「絵画のミカタ」(群馬県立近代美術館、二〇二〇)、「カラース」(ポーラ美術館、二〇二四)などに出品しています。

## 大庭大介(前・後期)

一九八一年袋井市に生まれ、活動の初期より、光や空間を色によって表現すること、そしてその生成の仕組みに関心を持ち、光学顔料を含むアクリル絵具を用いた絵画を制作してきました。近年では個展「Contactee/Tied Light 照らされた者/結光」(京都 蔦屋書店、二〇二五)開催の他、二〇二三年には虎ノ門ヒルズステーションタワーに大型絵画二点が恒久設置されました。

## 小左誠一郎(前期のみ)

一九八五年焼津市に生まれ、近年では「VOCAL展2024 現代美術の展望―新しい平面の作家たち」(二〇二四)、「都



石田徹也《飛べなくなった人》1996年 静岡県立美術館蔵

美セレクション 絵の辻」(二〇二三)などに参加しています。作家自身の記憶、塗る行為、画面上の偶然が一体となった作風を特徴としています。二〇一九年より清水にアトリエを構え制作を続けながら、アーティストランススペース「HANSOTO」の管理人として展覧会の企画などを行っています。

会期中イベント  
ゲスト・トーク

二月八日(日) 午後二時～四時

会場：静岡県立美術館 講堂

四人の出品作家と学芸員が、中村宏の作品や一九五〇年代以降の日本の絵画史と自作の関わりについて語り合います。

(上席学芸員 川谷承子)

# 横井弘三《花籠持てる子供》と その県立葵文庫への 収蔵経緯について

上席学芸員 喜多孝臣

はじめに

洋画家横井弘三（一八八九—一九六五）による油彩画《花籠持てる子供》（一九二三年作）〔図1〕の静岡県立中央図書館から当館への管理替手続きを進めている。本作は、中央図書館の前身である県立葵文庫（以下、葵文庫）に一九二八年（昭和三）に収蔵された。版画家小川龍彦が郷土静岡の懐かしい風景を回想した『続・思い出のしずおか』には、葵文庫に触れた一節があり、そこに次の記述がある。

「葵文庫時代の風格には親しみ深いものがあった。／二階の閲覧室に掲げてあった家

達公筆の「葵文庫」の額、川村清雄の波の図、栗原忠二の水彩画、児童室の横井弘三の油絵などどうしただろうか。昔の高校生、中学生、女学生でここに勉強の思い出をもつ人多し。」<sup>1)</sup>

ここにある「横井弘三の油絵」が本作のことであろう。本作は葵文庫の一階にあった児童室に掛けられていた。いつの時点までその場所にあったのか定かでないが、小川の記憶に残るように児童室を利用した往時の子どもたちに親しまれてきたのではないか。

本作の収蔵経緯は、葵文庫の館報に次のように記されている。

「小笠原郡伊藤文一郎氏のご斡旋に依つて先頃横井弘三氏の洋画の大額面が寄贈されました。無邪気な女児二人を画いて一見思はずほ、笑まれるやうな気持ちのよい画です。流石は特異の画境を示される横井氏の作だと領かれます。近いうちに児童室に掲げられる筈ですが、その晩には一段の光彩を放つてさぞや小さき読書人のよきお友達になることを喜んでゐます。」<sup>2)</sup>

ここに名のあがった「伊藤文一郎」は、時期と地名が符号することから小笠原郡日坂村の村長を四代、七代、十一代と三期にわたりにつとめた人物を指すと思われる。ただし、伊藤の「ご斡旋」とあり、伊藤が寄贈したわけではないようだ。本小論では、横井弘三と本作を紹介するとともに、この「ご斡旋」と記述された寄贈の事情を探ってみたい。

## 横井弘三と《花籠持てる子供》

横井弘三は、正規の美術教育を受けず、独学で絵を学んだ画家である。この画家の

名が世間に知られるようになったのは、公募展初出品となった一九一五年の第二回二科展にて、出品作《霽れゆく園》が期待の若手に贈られる梶牛賞を受賞したこと。さらには、翌年の第三回展でも《楽しい花園》が優秀作に与えられる二科賞を受賞し、立て続けに在野美術団体の二科会より大きな賞を受けたことによる。「幼稚」、「不器用」、「純朴」と評される横井の素人画家ならではの画風が二科会の評価を受けた原因には、「欧洲最近美術界の傾向」からの影響がある。そのようにいち早く論じたのは、西洋美術史家澤木四方吉であった。西洋美術の最新動向に通じた澤木は、ゴッホやゴーギャン、セザンヌ等、ポスト印象派の画家たちの「単純、素朴、原始的力等の表出を目的とする」表現に横井は影響を受けており、そのため「我国の洋画界の新傾向を代表する」二科会の画家たちは、横井作品を評価した。そのように澤木は、美術史の大きな流れの中に横井を位置づけた。のちにあらた発表される横井の文章や、二科会員による横井評は、澤木の見立ての確かさを裏打ちしている。

こうした澤木の横井評に付け加えるならば、横井のポスト印象派受容は、実作品を通じてではなく、書物を介して行われた理念的なところに特徴があった。横井は、当時の書物に書かれたゴッホら芸術家の生き方から求道的に芸術を追い求める理想的な芸術家像を強く植え付けられ、自らの指針とした。売り絵を描くことを良しとせず、自身の個性の表現を追求するためにあえて素人画家であるという位置に立ち止まり続

けることで、横井は美術界に独自の位置を占めていくのである。

《花籠持てる子供》は、一九二三年の二科展出品作。横井が愛し、たびたび画題とした彼の父が経営する東京府荏原郡大崎にあった植物園「愛花園」を背景に、愛娘二人を描いた作品である。画面いっぱい娘二人を真正面からとらえたその屈託ない構図や立体感の少ない描写は素朴ながら丹念であり、描くことの喜びに満ちている。二科会で活躍した初期の横井の出品作は本作の他、現存明らかなものは一つもない。本作は横井が一般的人気を勝ちえた当時の作風を見ることができる貴重な作品といえる。

## 横井弘三の「贈る絵」事業と 《花籠持てる子供》の行方

一九二二年には二科会会友にも推され、



図1 横井弘三《花籠持てる子供》1923年 キャンバス、油彩



順調に画家の道を歩み進めた横井に転機が訪れたのは、一つの個人的な事件と未曾有の大災害による。

一九二三年年明け頃、横井は火事により自作を三点焼失させた。この経験から、自作をいたずらに保管するのではなく多くの人に見てもらう環境におくことを望むようになる。すぐさま横井は、作品を安全に保管し、希望者が鑑賞可能な公共的建築であることを条件に寄贈をはじめ、多くの作品が東京市立日比谷図書館などに収蔵されることになった。

翌年九月一日に関東大震災が起きる。この震災に際し、寄贈先の一つであった芝浦小学校の校長が御真影とともに横井の作品を持ち出し守った。横井はその行為に感銘を受け、自作への厚志に報いるべく、被災小学校の児童の震災で傷んだ心の慰みのため、児童向けに制作した作品を贈る「復興児童に贈る絵」事業を始める。その全容は明らかでないが、少なくとも震災翌年の一九二四年には、東京市の直営小学校や東京横浜の焼失した学校など一四〇校の小学校の希望をうけ、寄贈を終えたという。横井は、自作を売らずに公共にひらくという自らの理想を実現したこの事業を世に知らしめるべく、「復興児童に贈る絵」の最初の一部をまとめて、一九二四年の二科展に展示しようとする。しかし、同作は二科会に受け入れられず陳列見合わせを申し渡された。自身にとって記念碑であり社会にも資すると考えた「復興児童に贈る絵」出品見合わせは、横井に大きな失望を与え、即座に二科会を脱会。ここから横井は誰かに作品を評価されるという展覧会の鑑査システム

自体に疑義を持ち始める。以後、横井は、大正期新興美術と呼ばれる新たな美術運動のうねりに身を投じ、誰もが自由に描いた作品を公表できるアンデパンダン展組織に乗り出していった。

一方、自身の理想の道たる「贈る絵」事業も同時期に拡大させている。その対象は、小学校や図書館に留まらず、「労働者集会所、養老院、托児所、公会堂、カンゴク、病院、停車場の待合室」とさらなる公共空間へと広がっていたようだ。

それでは《花籠持てる子供》はどうなったか。一九二六年九月、青山会館にて横井の「贈り絵展」が開催された。本展は、過去十カ年所有の作品三百点を全国の公共団体に分配する「前に「惜別」のために開かれたという。同展にこの作品の出品が確認でき、横井の「贈る絵」事業の対象作となっていたことがわかる。本展と同じ年に公立図書館である葵文庫が開館し、先述の伊藤文一郎の「ご幹旋」により《花籠持てる子供》は一九二八年に寄贈された。「ご幹旋」とは文字どおり「幹旋」なのであり、本作は作者である横井本人から寄贈されたのだろう。つまり、葵文庫への本作の所蔵は、横井弘三という作家の根幹に関わり、彼の進む道を大きく変えることになった公共空間への「贈る絵」事業の成果の一つであったと言えよう。

多くの人に見てもらいたいと横井が望んだとおり、《花籠持てる子供》は葵文庫の児童室に掛けられた。そこで、子どもたちの眼を楽しませ、美術の常設展示施設のない当時にあつては、のびやかに描くことの喜びを伝えてくれる身近な一つの扉にもな

っていただろう。本作が静岡に来てからおよそ百年が経った今、横井が作品寄贈した当時にはなかった公共の美術館たる当館に本作はとるを移す。ここでも多くの人々が「思はずは、笑まれる」べく、末永く観覧に供していききたい。

- 1 小川龍彦「続、思い出のしずおか」中日新聞シヨッパ社、一九七六年、四十二頁。本稿では記事名、引用文中の旧字体は新字体にあらためた。引用文中の／は引用元の改行を示し、「」は稿者による補注を示す。
- 2 「館近時」『葵文庫ト其事業』二八号、一九二八年十月、七頁。
- 3 「十二」日坂村長一覽『日東人物誌』掛川市立日坂小学校PTA事務局、一九八四年、百十四頁。
- 4 澤木梢「二科展評」『三田文学』七卷十一号、一九一六年十一月、一三八頁。澤木梢は澤木四方吉の筆名。
- 5 同前註、一三九頁。
- 6 同前註。
- 7 同註四、一三四頁。
- 8 横井の書物を通じたポスト印象派受容については拙論「素人画家横井弘三と美術雑誌『みづゑ』」『没後50年「日本のルソー」横井弘三の世界展』図録（読売新聞社／美術館連絡協議会、二〇一五年）を参照。
- 9 「横井弘三氏の一番発」『朝日新聞』一九二三年一月九日朝刊、五面。
- 10 「彙報」市立図書館と其事業」十三号、一九二三年四月、十三、十四頁。横井弘三「油繪の手ほどき」博文館、一九二六年、二七四、二七五頁。
- 11 「横井画伯 感激が生んだ十八景」『朝日新聞』一九二三年十二月十八日夕刊、二面。
- 12 伊藤文一郎「画家横井弘三氏と其美術」『教育研究』二七八号、一九二四年十月、百一十一頁。
- 13 横井弘三「造化に訴ふ」『中央美術』十卷十号、一九二四年十月。
- 14 横井と大正期新興美術運動との関わりや横井が主宰したアンデパンダン展については、滝沢恭司「横井弘三の理想大正期美術展について」『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所編、中央公論美術出版、二〇〇五年）、五十殿利治・菊屋吉生・滝沢恭司・長門佐季・野崎たみ子・水沢勉「大正期新興美術資料集成」（国書刊行会、二〇〇六年）を参照。
- 15 「税所」篇二「卓上雑考」『みづゑ』二四九号、一九二五年十一月、二十頁。
- 16 『アトリエ美術年鑑』アトリエ社、一九二六年、三八頁。
- 17 同註二。

## 本の窓

村上隆、ビートたけし著  
『ツーアート』  
光文社 二〇〇八年



芸人や映画監督といった様々な顔を持つ北野武さんと、現代美術家の村上隆さんのアートに対する考えを知ることができる一冊です。作中では「アートとは何か」「どうしたらアートが生まれるか」といった様々な問いに対する考えを述べています。特に北野武さんの視点が面白く、ユーモアを交えつつも核心をつくような発言は流石だと感じました。「感情に訴えかけるものがアートならお笑いもアートだ」といった独自の考えは、北野さんの話の上手さも相まって、非常に興味深いものでした。北野さんの考えには「常識を疑うこと」が根底にある気がしますが、これはアートを鑑賞するうえでとても大切な視点かもしれません。ぜひ一読してみてください。

（主任 山本勇実）

# 残軀天所赦 不樂是如何

企画総務班長 山梨利之

「馬上少年過 世平白髪多 残軀天所赦

不樂是如何」戦国武将の伊達政宗が詠んだといわれている詩です。「馬上少年過ぐ」

は人気作家、司馬遼太郎の短編小説にもなっているの、ご存じの方も多いのではないのでしょうか？この漢詩は「馬上少年過ぐ、

世、平らかにして白髪多し、残軀天の赦すところ、楽しまずんばこれいかん」と読み

下し、大意は「若かりし頃は戦場を往来したもののだが、年老いた今は平和になった。

天から与えられた余生を楽しまなくてどうする。」だそうです。

小職は、もとより戦場を駆け巡った経験はないけれど、定年まであと一年、職業人としての人生の終焉を迎えつつあります。そのためなのか、ようやく「残軀天所赦



小職が最近読んだ書籍

不樂是如何」を大いに共感できる境地に達しました。

無趣味、無芸大食、ついでに美術や文化から最も遠いところで生活していた小職は、昨年四月に縁あって美術館勤務となりました。と、同時に、少々考古学に興味を

持ち、「将来、考古学者になろう。」などと、今から思えば随分と分不相応な幻想を抱いていた中学生の頃、当館の隣にある静岡女子大学(当時、現県立大学)の北側にある古

墳を見学しに来たことを思い出しました。それ以来、人類の起源や縄文・弥生時代に

まつわる書籍を読み、自宅近所の古墳を巡りつつ、国立博物館にも足を運び、古の時に思いをはせています。「もう一度人生をやり直せるなら、考古学を学びたい。」など

と自分の勉強嫌いを棚に上げて、こんな愚考をしている次第です。「伊達者」の語源といわれる伊達政宗は晩年まで人生を楽しんだそうです、小職も「かくありたい」ものです。

当館においては、今まで縄文、弥生、古墳時代の企画展示はなかったようで少々残念です。近々、このような展示会の開催を願うばかりです。

小職が最近読んだ書籍

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館) 年未年始  
※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
企画総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館  
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## ロダン館 ナイトミュージアムのご案内

実施日時：2026年1月24日(土)・31日(土)、2月7日(土)・14日(土)・21日(土)・28日(土)、3月7日(土)・14日(土)  
18:00～20:00 日時指定予約制  
対象：小学生以上(小中学生は保護者同伴)  
予約枠：各日3枠(18:00、18:30、19:00入場開始) 各枠15名(先着順)  
料金：300円/70歳以上・大学生以下無料  
※当日の企画展または収蔵品展の半券で再入場可能です。  
注意事項：懐中電灯は貸出制、持ち込み不可。

ご予約はコチラから→



## 関連イベント

### ■学芸員によるフロアレクチャー

●ロダン館  
実施日時：2026年1月24日(土)、2月7日(土)・28日(土) 3月7日(土)  
いずれも18:15、19:15開始  
集合場所：ロダン館入口自動ドア前

●収蔵品展  
実施日時：2026年1月31日(土) 18:15、19:15開始  
集合場所：本館第7展示室(収蔵品展 展示室)

■収蔵品展出品作家によるフロアレクチャー  
実施日時：2026年2月21日(土) 18:00～20:00  
集合場所：本館第7展示室

灯りを落とした展示室で、収蔵品展「2000年代の絵画」の出品作家(大庭大介、小左誠一郎、門田光雅、持塚三樹 [50音順])がフロアレクチャーを行います。

※ロダン館ナイトミュージアムご予約の方はイベントにもご参加いただけます。  
※収蔵品展の展示は、収蔵品展のフロアレクチャー開催時のみご鑑賞いただけます。また、作品保護のため、レクチャー時は担当学芸員または出品作家が懐中電灯で作品を照らして解説を行います。